特集2

地域一丸で村づくり
「集落の農地は集落で守る」

迫目「7月風景」

地域（村）づくりの経緯

迫目（はざめ）地区は「三間米」の産地で知られる宇和島市三間町の南部に位置し、盆地の気候を生かした水田地帯にあります。水稲作業の機械化や、宇和島市中心部に近い地理的条件等から兼業化が一気に進みました。そこに、高齢化、担い手不足という要因も加わり、耕作放棄地は増えていきました。一方、農業用水は昔からため池を利用していることもあり、大変まとまりのよい地区でもありました。

このような中、米作りに危機感を持った迫目地区の農家は、「集落の農地は集落で守る」を合言葉に集落での協議を重ね、平成13年に「迫目集落営農組合」を設立しました。地区農家のほとんどが参加して、水稲作業受託等に取り組みました。

しかし、耕作放棄地がその後増加し、オペレーターの負担が大きくなりました。その解決の方法として法人化についての検討を始めました。何度も勉強会等を行い、平成19年1月に「農事組合法人はざめ」を設立し、水稲の作業受託、大豆栽培、豆腐の加工販売を主要業務とし、活動を開始しました。1集落1農場型の特定農業法人となったことから、集落の皆が関心を持ち、また期待も大きかったと思います。理事会には、自治会、農事組合、各地区代表者も加わり、法人の決定事項が地区内に速やかに伝わる体制を整えました。水稲・特別栽培米部、機械利用・オペレーター部、大豆・園芸部、果樹園芸部、豆腐加工・女性部を組織し、活動をしています。

松山市の量販店で試食販売

「農事組合法人はざめ」の設立までの裏話

それは、平成12年4月、集落の人々の交流の場、薬師堂での花見の席でした。皆さん、迫目地区の耕作放棄面積が過去5年間で倍増しているのに危機感を感じていて、「なんとかせんといかんのう」と言う様な会話の中、他地区での集落営農の取り組みが話題に上りました。「うちもやらんといけるかい」その一言で気運が高まりました。その日のうちに大体の話がまとまり、「集落の農地は、集落で守る」を合言葉に、平成12年12月に組合設立の検討委員会を設置。農業改良普及指導員からアドバイスをいただきながら幾度もの検討を重ねました。老人会や婦人会といった会合にも出向き、「集落営農」の説明をして廻りました。中には、「うちは、最近農機を買い替えたばかりじゃが…」「自分の土地はどうなるの？」などと、さまざまな意見や質問が出ましたが、説明を重ね納得してもらいました。平成13年8月に集落営農組合を設立しました。

農事組合法人 はざめ
代表理事
土居　勇吉

農林大臣賞受賞

共同での稲刈り

組合結成から3年くらい経過した頃、高齢化がますます進みオペレーターの負担が増えてきました。そこで迫目地区の農地を維持していくために、平成17年2月に法人設立発起人会を結成。13人の発起人が集まり、法人化のための勉強会を何回も開き理解を深め、平成19年1月に「農事組合法人はざめ」の結成となりました。

具体的な取り組み

法人化により、みんなで一致団結して問題を解決していこうという気運が高まり、更に集落の結束は強くなりました。耕作放棄地になりそうな農地については法人に相談することを申し合わせ、その農地を法人で引き受ける。このことにより集落内の耕作放棄地はほとんどゼロになりました。

また、ブロックローテーション（区画別転作）により大豆栽培を行い、栽培面積も増加しています。法人の主要業務は、水稲作業受託、大豆栽培等です。集落に新たな雇用機会も創出しています。また、農地・水・環境保全向上対策にも取り組み、集落ぐるみで農村の環境を維持しています。

また新たに、人にやさしい、環境にやさしい。「エコえひめ　特別栽培米」にも取り組んでいます。

共同で農作業

○法人に水稲の作業を委託した結果、集落内の認定農業者は、ゆずやイチゴ栽培に集中的に取り組むことができ、作業効率と生産性が向上している。このように、認定農業者と法人が共生できる集落営農を実践しています。

○この地域は傾斜地が多いため、水田畦畔の面積が広く、除草作業が大変大きな負担となっていました。それを解消するために、平成15年度から「集落住民、行政、農協」と協力して、雑草の発生を抑制するセンチピードグラス（被覆植物）による省力管理の実証に取り組みました。2～3年は効果がでて草刈り作業が随分省力化されましたが、4年目からは中から雑草が生えたり株が腐ったりし、その栽培方法にはまだまだ課題を抱えております。

集落活動が全国で評価

集落が一丸となっての活動が高く評価され、平成20年度　豊かなむらづくり表彰において、農林大臣賞を受賞することができ、組合員の自信と今後に対しての弾みとなっています。

地域の人々との交流

地域との交流

法人では、土手や水路の整備、休耕田にレンゲを植えたり、花壇にコスモスを植えたりの景観整備、それからため池の「池干し」などのイベントもやっています。さらに地域にある名所旧跡も大切にしていこうと、由来の伝わる場所の整備も行っています。

おわりに

法人化したから大丈夫ではなく、法人化してどうにか農地が維持でき、将来につないでいけるんだと思います。米の価格が暴落し、農家は米だけでは生活できないのが現状。ほかの農作物を作り、法人の仕事の日当でなんとかなっているんです。米の販売競争は厳しく、適正な価格で売ることが難しい中、迫目の抜群な味の米を、売り方を工夫してどうにか適正価格で消費者に販売していくことを模索しています。こうした取り組みの中から、販売のエキスパートが育ってくれればいいと思っています。迫目地区では、今こそみんなの頑張りの時。数年後には、笑顔が溢れ、若い後継者が育ってくれるような農業経営を目指したいと思っています。